企画部　部長　籾山　博資

今回シンガポール共和国との草の根国際交流事業において、小・中学生２７名の随行を体験させていただきました。子供たちの体調管理や、交流時の言葉の問題など、随行させていただく上で不安もありましたが、今回の主役である子供たちが一生思い出に残る旅となるようお手伝いができたらと考え、交流事業に臨みました。

中部国際空港からシンガポール航空にて６時間のフライト後、チャンギ国際空港に到着、バスに乗り換え、２０分程でイーミン小学校へ到着し、歓迎式典に参加しました。

イーミン小学校、ニーアン中学校の児童・生徒の楽器演奏や剣を使った武道による歓迎を受けた後、ホストファミリーとのマッチングが行われ、学校の計らいでホストファミリーと一緒にバイキング形式での夕食会が行われました。食事が済むと、いよいよ２日間のホームステイの始まりです。不安そうな表情を浮かべながらホームステイ先に向かった子供も見受けられました。

翌日、ホームステイ先の家庭を訪問すると、少しはにかんだ様子で元気な姿を見受ける事ができました。受入されたホストファミリーの皆様が大変気を使われ、美浜の子供たちへのおもてなしの心と深い愛情をもって接していただいていることがよくわかり、感謝の気持ちで一杯になりました。

月曜日の朝、学校へ出かけると、シンガポールの子供とすっかりなじんで交流している姿を見る事ができ、子供たちの順応性の早さに驚かされました。

３泊５日の大変短い交流事業でしたが、この経験が参加した子供たちにとって、すばらしい財産になったと考えています。

今回このような随行の機会に恵まれました事に感謝すると共に、この交流事業に参加されました皆様のますますのご活躍を期待します。

布土小学校　校長　河村　恵子

今回の旅の結団式での決意表明で、私は「旅には三つの楽しみがある。三つとも楽しもう。」ということを話しました。三つの楽しみとは、事前の準備・実際の旅・事後のまとめの三つのことです。事前の楽しみでは、３回の学習会を通して、シンガポールの文化や歴史、英会話などを学習し、これによりわくわく感が高まり、ホームステイへの覚悟もできたかのように思えました。

実際の旅では、まず驚いたのが歓迎会でした。民族舞踊や琴の演奏、太極拳のような舞踊で歓迎していただきましたが、そのレベルの高さに驚かされました。後であの演技はどのように練習したのか聞いたところ、教育課程の中にあるクラブ活動で、外部からその道の専門家が来て教えているということでした。その後のホストファミリーとのマッチングで、子供たちは、ちょっと不安そうでしたが、二日後に会うと、みないい表情をしていました。「もう楽しくてしかたない。」と言う子、「英語が通じなかった。」と言う子、「ちょっとホームシックにかかった。」と言う子などさまざまでしたが、それなりにいい体験になったようでした。

その後の音吉の碑の見学や博物館の見学には、事前の学習が役立っていたように思いました。マリーナ・ベイ・サンズの屋根であるサンズ・スカイパークへも、政府観光局の方のご厚意で行かせていただけたことは本当にラッキーだったと思います。

そして、事後の楽しみが、こうした報告文や写真で記録を残すことです。どうかこの作業が、子供たちにとって楽しい作業になっていることを心から祈っています。

河和小学校　教諭　杉浦　豊実

シンガポールに到着し、子供たちはそのまま土、日とホームステイ先を訪問しました。到着してすぐの個別行動に、子供たちの心臓がバクバクと音を立てているのを、「がんばれ！」と心の中で応援して送り出しました。子供たちは不安を抱えながらも、片言の英語で精一杯ホストファミリーとコミュニケーションをとろうと頑張りました。

３日目のイーミン小学校訪問は、子供たちにとって驚きが多かったようです。電子黒板を使って授業が展開されるなどＩＣＴ環境が進んでいること、授業が早朝７時半から始まり１３時半に下校すること、１０時からの休み時間に軽食をとることなど、日本の学校との違いにびっくりしていました。

子供たちからニコニコの笑顔が見られたのは、体育や図工などシンガポールの子供たちと一緒に体験的な学習をしたときです。日本とシンガポールの子供が、一緒に学習するプログラムを設定してくださったシンガポールの先生に感謝します。

見学地や訪問先では、日程的に慌ただしかった中、子供たちは、シンガポールの文化や歴史について積極的に多くのことを学び、よい体験ができました。特に、マリーナ・ベイ・サンズやマーライオンなどを訪問したときは、子供たちの目が一段と輝いていました。

シンガポールで様々な経験した子供たちは、シンガポールのすばらしさを発見できたと同時に「やっぱり美浜町っていいな」って思ったに違いありません。

野間中学校　教諭　松山　宜申

今回、シンガポール交流で引率させていただき、５日間という短い期間ではありましたが、シンガポール独自の文化や歴史など、本当に様々なことを学ぶことができました。

多くの民族が、同じひとつの国の中でどのように生活しているのか、一部分でしかありませんが、実際に目にすることができて、大変貴重な経験となりました。

また、ニーアン中学校を訪問した際には、ＩＣＴ活用や授業づくりのヒントを数多く頂きました。教室の環境づくりや、先生方の熱心な指導、日々、研修を重ねているといったお話もうかがうことができて、自分自身の授業を振り返るきっかけをいただきました。

また、シンガポールという、特別な場所での子供たちの様子を直に見ることで、いつもと違う視点から、子供たちの成長に携わることができて大変うれしく思います。

役場からセントレアを発つまでの期待に満ちた顔。シンガポールに到着し、ホストファミリーと出会い、それぞれの家庭に分かれて過ごす不安を抱えた顔。５日間の交流を終え、ひとまわり大きく、自信に満ちた顔。日本に戻り、役場で保護者の方や職員の方、先生たちに迎えられ、ほっとした顔。とびきりの笑顔。

本当にたくさんの表情を見せてくれました。子供たちには、ぜひ今回の経験を活かし、国際交流の素晴らしさをより深く感じてもらいたいです。また、自分自身もこの経験をより多くの子供たちに伝えていきたいです。

学校教育課　主事　鈴木　太一

今回、初めて国際交流の担当をさせてもらうことになりましたが、海外との連絡や調整など戸惑うことの連続であり、事実旅行直前まで、多くのことが心配でした。

しかし、いざ旅行が始まると、子供たちのしっかりとした発言や行動に心配な気持ちは薄らいでいきました。実際子供たちは、初日からのホームステイという大人でも大変な状況に４日間もの長い間ホストファミリーの方とコミュニケーションを取り楽しく過ごしていました。その証拠に、何かあったときに連絡するよう伝えていた引率の携帯電話は一度も鳴ることはなく私達引率者を安心させてくれました。

このことは子供たち一人ひとりが真面目でしっかりとした子供であったことはもちろん、事前学習会で真剣に勉強をして、今回のシンガポールの旅へ明確な目的意識を持って臨んでいた結果であったと思います。

そんな素晴らしい交流をしてきた子供たちが私にホームステイ先や学校交流での楽しかったエピソードを活き活きと話してくれたり、また報告会で自分の体験を堂々と発表している姿を見たりすると、旅行前の戸惑いや心配事がすべて吹き飛び、私自身国際交流のすばらしさをひしひしと実感しました。

子供たちには今後、今回の国際交流が一つのきっかけとなりシンガポールだけでなく世界に興味を持ち、高校、大学そして社会人と成長していく中で海外とつながるチャンスを自分から求めていき、美浜町から世界へ羽ばたいていって欲しいと、願っています。

学校教育課　指導主事　佐藤　茂樹

シンガポールとの国際交流事業は、本年度から教育委員会に主幹が変わり、シンガポールへの派遣についても、学校の先生方に参加・引率をしていただくことになりました。

そこで、派遣を前に、頭と心の準備をするための学習会として、河村校長先生に「ホームステイの心得」、杉浦先生や松山先生に「シンガポールの文化や歴史」、そして外国語活動指導員の斎藤先生や日福大の学生達に「ホームステイ先での英会話」の事前指導をお願いしました。

３回の学習会では、先生方が自作した資料を使って、子供たちが意欲的に事前学習に取り組んでいました。また、イーミン小・ニーアン中で披露する子供たちの出し物についても、先生と子供たちが一緒になって、楽しみながらつくりあげていくといった光景がありました。

学習会を通して、子供たちは、シンガポールについての理解や学校や美浜町の代表者であるという意識を高めていっただけでなく、子供どうしの連帯感をもつことができたと思います。

帰国後には、「英会話は難しかったけど、単語や身振りでも通じることがわかりました。」「事前に学習したことが役に立ち、シンガポールで貴重な体験ができました。」などの感想が寄せられ、報告会でも、子供たちが自信をもってシンガポールでの体験や感想を発表する姿がありました。シンガポールでの体験を通して、一生の宝物を手にした子供たちの姿に、確かな成長の跡を感じました。

今回の派遣では、子供たちがこれまで以上にシンガポールで充実した時間を過ごすことができたと思います。その背景には、保護者の方々のご理解はもちろん、派遣に携わった関係の方々や各学校の先生方、そして何より引率していただいた先生方の指導や支えがあったからです。

今後も、美浜町の国際交流事業について、ご理解、ご協力いただきますようお願いいたします。